
弁当からミックス・ランチへ

博物館とハワイ日系移民史の表象

“From Bento to Mixed Lunch”—History Museums and the Representation of Japanese Americans

矢口 祐人*

YAGUCHI Yujin

キーワード：博物館，歴史，表象，日系アメリカ人，エスニシティ

KEY WORDS: museum, history, representation, Japanese Americans, ethnicity

In recent years, scholars in the United States have been becoming increasingly concerned with the lack of historical knowledge among the general public. However, at the same time, various sites and institutions that commemorate certain aspects of the American past have remained popular. History museums, in particular, draw a large number of people every year and play an important role in shaping people's notions of the past.

This paper explores the cultural significance of history museums in the United States. First, it explains the importance of history museums by discussing a recent survey on the sense of the past shared among Americans. The survey shows that history museums play an important part in people's daily lives by providing the kind of historical knowledge that is deemed highly trustworthy. This section also provides an overview of the state of scholarship on the topic of the cultural significance of museums.

After the general introduction to the current state of museum scholarship, this paper reviews a museum exhibit. It focuses on an exhibit entitled “From Bento to Mixed Lunch,” outlining both the strengths and the problems of the exhibit. The review is offered here as an example of one of the ways in which museums are being studied by scholars interested in investigating the cultural significance of museums today.

* 東京大学大学院総合文化研究科助教授 Associate Professor, The University of Tokyo

I. アメリカの歴史博物館

1987年9月、当時、全米人文科学基金(National Endowment of the Humanities)の会長だったリン・チェイニーは『アメリカ人の記憶』という報告書の中で、アメリカの学校における歴史教育の現状を厳しく非難した。「過去の記憶を拒絶することが、我々の国家の特性であるようだ」と彼女は憂い、「正しい」歴史教育の復活を提唱した[Cheney n.d.]。周知の通り、チェイニーの唱えた「正しい」歴史観は、その後、大いなる議論を巻き起こした。教育の現場でどのような過去が教られるべきか、そもそも歴史とは誰のものなのか、必ず読まれるべき「聖典」は存在するのか、すべての国民に適用されるべき普遍的な教育基準は必要であるのか。こうした重要な問題がマルチカルチュラリズムという文脈の中で活発に議論された[Zabierek 1998; 明石・飯野 1997: 336-338]。

チェイニーの言う教育現場における「正しい」歴史観に関する議論は重要であるし、今後も続けられていくべき課題である。しかし、その一方で、チェイニーの主張の前提となっているアメリカの「過去の記憶」そのものについて考える必要もあるだろう。果たして、チェイニーが主張したように、アメリカでは本当に「過去の記憶」が「拒絶」されているのだろうか。学校教育に限定しないで観察してみると、そうでもないことがよく分かる。歴史関係のテレビ番組や史跡探索ツアーは大変人気があるし、全米で開催される様々な歴史祭りには多くのひとびとが参加する。歴史家マイケル・フリーシュは「アメリカ人が歴史の記憶を喪

失しているという懸念がある」一方で、「明らかにひとびとは歴史に強い興味を抱いているし、その興味は増す傾向にある」と指摘している[Rosenzweig and Thelen 1998: 3]。

とりわけ、アメリカでは毎年数多くのひとびとが歴史博物館を訪れる。近年、アメリカのミュージアムは一大「ブーム」だと言われている。歴史博物館を含め、ほぼすべての種類のミュージアムで来館者数が増加し、新設ラッシュが続いている[Lusaka and Strand 1998: 55]。全米博物館・美術館協会(AAM)が行った最近の調査では、1994年に歴史博物館と史跡を訪れたひとびとの数は年間で約6900万人と推定されている。しかし、これには子供の入場者数は含まれないし、繰り返し訪れたひとの数も含まれない。これらの要素を勘案すると、歴史博物館の総入場者数は1億3800万人にもなるとAAMは考えている[Lusaka and Strand 1998: 59]。国民のふたりにひとは、年に一度何らかの歴史博物館や史跡を訪れている計算になる。

この数値は、ロイ・ローゼンツワイグとデビッド・セーレンによるアメリカ人の過去観に関するインタビュー調査の結果ともおおよそ合致している。調査対象者の半数以上が過去1年以内に、何らかの歴史博物館や史跡を訪れている[Rosenzweig and Thelen 1998: 19-20]。もちろん「歴史博物館」や「史跡」をどのように定義するかによって、この数値は大きく変動する。ただ、いずれにせよ、チェイニーの心配とは裏腹に、アメリカの総人口の半数前後が毎年、歴史博物館や史跡を訪れ、何らかのかたちで「過去」との接点を持っていると推

測される。

さらに興味深いのは、歴史博物館で表象されている過去について、アメリカ人は深い信頼を寄せていることだ。ローゼンツワイクとセーレンによると、アメリカ人が過去とのつながりをもっとも身近に感じるのは、家族と集う時間である。祖母や祖父などを含めた親族が一堂に会し、昔話に耽るひとときが、過去を身近なものにする。しかし、そのような身近な過去よりも、博物館で展示されている歴史観の方が遥かに信頼度が高い。ローゼンツワイクとセーレンの調査によると、博物館の歴史解釈は学校での授業や歴史の本などと比較しても、もっとも信頼できるものとみなされている [Rosenzweig and Thelen 1998: 21]。

博物館に対するこのような人気と信頼は、「来館者に過去を肌で感じとり、過去に参加できるような感覚」を提供するところから来ているようだ。来館者は「博物館に行くことで、過去を実際に目撃したような」感覚を持つこともできる。つまり、「親族との集いと同じように、過去を身近に感じる」ことができるし、同時に「一次資料と触れ合うことで、歴史研究をしたような気分」を体験することもできるのだ [Rosenzweig and Thelen 1998: 105-107]。

以上のような調査結果をみても、今日のアメリカでは、「歴史」や「過去の記憶」といったものに対する関心は決して低くないことが分かる。また、そのような興味に歴史博物館が大きな役割を果たしていると考えられる。学術書や教育の場で提供される歴史に対して魅力を感じない者が多い一方で、歴史博物館や史跡は、ひとびとの心にある過去に対する関心を喚起し、維持す

ることで、アメリカ人の抱く歴史観に強い影響を与えていると考えられる。ローゼンツワイクとセーレンによる詳細な調査報告は、アメリカ社会における歴史観や過去の記憶という問題を考える際、歴史博物館が極めて重要な意義を持つことを示している。

むしろ、博物館で表象される歴史はそれぞれの趣旨や特徴によって様々である。アメリカ人の抱く歴史観も教育、人種、エスニシティ、ジェンダーなど多様な要因に条件づけられているから、歴史博物館がアメリカの過去の記憶を決定づけているというわけではない。それでも、歴史博物館はアメリカに住む「多様な集団に対して」大きな影響を持つことで、歴史を教示する「中心的な役割」を果たしていると考えられる [Rosenzweig and Leon 1989: xiii]。

このような状況を確認したうえで、博物館で行われる歴史展示の文化的意義を考察するのが本稿の目的である。近年、歴史学、社会学、人類学など様々な分野の研究者が歴史博物館に注目している。知の分類化と権力が交錯する場としての博物館 [Clifford 1988: 215-251]、アメリカ社会における知の体系の確立と博物館 [Conn 1998]、近代的権力装置としての博物館 [Bennett 1995]、ナショナリズムと博物館 [Handler 1985]、帝国主義と博物館 [Coombes 1994]、異文化への「まなざし」と博物館 [吉田・マック 1997] など、博物館を近代社会の枠組みの中で、様々な視座から捉えた研究がなされている [Karp and Lavine 1991; Karp, Kreamer, and Lavine 1992]。

筆者の研究分野であるアメリカン・スタディーズにおいても、史跡や歴史博物館の研究をアメリカ社会における記憶や権力の問

題と関連づけて考察する試みが積極的に行われている [Vogel 1991; Gillis 1994; Piehler 1995; Brigham 1995; Handler and Gable 1997; Sturken 1997; 能登路 1999]。米国のアメリカ学会では、1989年からその学術誌 *American Quarterly* 上で、展示のレビューを書評と同様の形式で掲載するようになった。また、同年、アメリカ史研究の代表的な学術誌 *Journal of American History* でもミュージアム・レビューが開始され、歴史博物館展示のレビューがなされるようになった。この結果、大学の研究者と博物館の学芸員との交流の環が広まり、対話が進んだ。また、上記の一連の研究書が示すように、研究者の博物館に対する興味と認識は高まりつつある。これらの研究方法は歴史研究から展示批評に至るまで多様であるが、研究の蓄積の結果、アメリカの博物館の歴史的、社会的意義が体系的に浮き彫りになってきている。本稿では、これらの研究の流れに沿いながら、ひとつの展示に焦点を絞り、アメリカの博物館におけるエスニシティと歴史表象の現況とその問題点を具体的な事例を通して考察することで、博物館における歴史展示の今後の可能性を模索したい。

II. 「弁当からミックス・ランチへ」

ここで論じるのは、ハワイのビショップ博物館 (1997年10月25日～1998年1月5日) とロスアンゼルス日系アメリカ人博物館 (1998年3月14日～1999年1月3日) で行われた、「弁当からミックス・ランチへ (From Bento to Mixed Lunch: Americans of Japanese Ancestry in Multi-cultural Hawai'i)」という展示である。

ハワイにおける日系アメリカ人 (Americans of Japanese Ancestry—以下 AJA) の歴史を、明治初年に移住した「元年者」から今日に至るまで、通史的にまとめた展示である。このような特定のエスニック・グループを表象する展示は、そのグループの歴史的、文化的アイデンティティを強化すると同時に、社会的な認知を得るためにも有効である。

したがって、ハワイやロスアンゼルスなど、日系アメリカ人の数が多い場所では、特に有益だと考えられる。

筆者は日系アメリカ人博物館でこの展示を見た。ロスアンゼルスのリトル・トウキョウにある古い寺を改装した博物館の二階全体が、本展示用の空間だった。来館者は入口から出口まで、一定方向に足を進めながら展示を見るようになっていた。ページのベニヤ板で覆われた壁は、高い天井から吊り下げられた白い蛍光灯の光を反射し、展示空間全体を比較的明るい雰囲気にしていった。

展示には、衣服、弁当箱、数珠、サーフボードなど、日本人移民とその子供たちの AJA が使っていたものや、かれらの生活を描写した古い写真などが並べられていた。そしてそれらの「もの」の意味を具体的に説明するために、英文のテキストを印字した白地のパネルがふんだんに使用されていた。また、入口近くに「典型的」な AJA 家庭のリビングルームを復元したり、真珠湾攻撃後の戒厳令下のハワイを展示する場には金網を設置したりして、過去を三次元的に再現する試みがなされていた。さらに数カ所にビデオモニターが設置され、今日のハワイに住む AJA の生活、第二次世界

大戦に参加した AJA 兵士による回想、ハワイに住む若者たちのインタビューなどが再生されていた。

「弁当からミックス・ランチへ」は、AJA 文化の歴史的变化を表現するための象徴として「弁当」と「ミックス・ランチ」という二種類の昼食を用いている。19世紀のハワイに渡った日本人の大半は砂糖きびプランテーションで働く農場労働者だった。展示によると、かれらは農作業に出かける時に、必ず手に弁当箱を携えていった。箱の下の方には白米が詰められていて、上におかずが少しだけのっている簡素なものだった。

昼休みにその弁当を食べる時、かれらは、ハワイアンやフィリピン、韓国、ポルトガルなどから移住して来た労働者とおかずを交換し合い、質素な昼食にちょっとした変化を与えていた。このような風習は、やがて様々な文化のおかずが混在する「ミックス・ランチ」(より一般的には「プレート・ランチ」)と呼ばれる、ハワイ特有の食習慣を生み出した。今日、ハワイで「ミックス・ランチ」を注文すると、ご飯と一緒に「テリヤキ・チキン」、「マカロニ・サラダ」、「カルア・ピッグ」、「キムチ」のようなおかずが出される。様々な文化を起源に持つおかずが、米という共通項と一緒に食されることで、新しい種類の食事が完成したのである。「ミックス・ランチ」とは、いろいろな文化がもたらした多様な要素がひとつの場に集められることで、ハワイに独特の文化が築き上げられたことを象徴的に意味している。

つまり、この展示はハワイを様々な文化が共存するマルチ・カルチュラルな場と定

義している。そのような文化の形成に AJA がどのように参加、貢献してきたかを示すことが展示の主な趣旨と言えよう。たとえば展示によると、ハワイの家庭では、どこの家に入る時も外靴を脱ぐことになっている。日本生まれの両親から AJA が受け継いだ風習を、AJA 以外のひとびとも取り入れた結果、靴を脱ぐことは特定のエスニシティに限定されるものではなく、ハワイ全体に共通する「ローカル」な習慣となった。このように、日本文化の様々な要素が伝統的なハワイ文化や他の移民の文化に受け入れられていった。

展示の主張を具体的に裏付けるために、様々な方法がとられていた。典型的な AJA 家庭のリビングルームを三次元的に復元した部屋には、ソファや本棚などの「洋風」家具が並べられる一方で、アメリカカ家庭には普通存在しない下駄箱、伊万里焼、だるまなどが並べられていた。壁には紋付き袴姿の一世夫婦の写真があり、そのすぐ横には第二次世界大戦中に撮られたと思われる、アメリカ軍の制服を着た AJA の男性と、純白のウェディングドレスを身にまとった AJA 女性の結婚式の写真があった。二枚の写真が並置されることで、和から洋への転換が示されると同時に、部屋の随所に残されている日本的な装飾は、和の要素がまだ残っていることを暗示していた。さらに、コアというハワイ特産の木を使ったテーブルランプや、(ポルトガル文化とハワイ文化の融合を示す)ウクレレなども配置され、ハワイ文化の混在性が表現されていた。

復元されたりビングルームの向かい側にあるガラスケースの中に、一世の女性が農

場で働く時に着ていた「プランテーション・スタイル」と呼ばれる着衣一式が陳列されていた。これは「日本の伝統をある程度保ちながら、他のエスニック・グループから学んだ」ものを組み合わせた結果、誕生したスタイルだった。

麦わら帽子は地元のラウハラ（たこの木の葉を乾燥させたもの）を編んだもので、上着となった紺のかすりは中国系移民の影響を示すという説明がなされていた。一世の女性が日本から持参した着物は、ハワイの気候や農作業に合うように、異文化を取り入れながら、独特のスタイルに変遷したのだった。日本文化の要素を他の国から来たひとびとが受け入れていったのと同様に、ハワイの日系移民は異文化を選択的に受け入れることで、独特の生活様式を確立していったことが表現されている。

展示の出口のそばにはビデオモニターが設置され、ハワイ生まれの若者たちによる自己紹介テープが再生されていた。日系四世、日系とアイルランド系、ネイティヴ・ハワイアン、中国系四世など、様々な背景を持つ若者たちが自分自身について語っているビデオを流すことで、ハワイ文化の多様性が強調されていた。

もっとも、「弁当からミックス・ランチへ」の趣旨は AJA の歴史を通史的に概観するものであるから、異文化との関係に言及しながらも、展示の中心はあくまで AJA だった。プランテーションでの生活を離れ、独自のコミュニティを築き、子供たちを教育していった過程。二世が第二次世界大戦中、第100歩兵隊、後に第442部隊で勇敢に戦ったこと。戦後、「アメリカ人」として認められた AJA が民主党員の白人

と協力してハワイに政治「革命」をもたらした、ハワイが州になった後には政治、経済の両分野で活躍してきたこと。一方で、三世の AJA が再び「日系」としてのアイデンティティを探るようになった結果、日本の伝統芸能が復活してきたこと。このような事柄が、具体的な資料を使って描写されていた。つまり、「弁当」から「ミックス・ランチ」に至るまでの過程は、AJA が「他の文化的影響を取り入れ」る一方で、「ある種の日本の伝統を守りながら」AJA としての地位を築きあげ、「ハワイの豊かで、マルチ・エスニックな社会の一員となった」歴史として表現されている [Chinen and Hiura 1997: 4]。

III. 展示の歴史観

「弁当からミックス・ランチへ」は、「AJA が自らの視点で」歴史を表現している展示である。ハワイの AJA コミュニティは積極的に「アルバムや思い出を喚起するようなもの」を展示の作り手に提供し、「世代間の話を掘り起こすよう」な展示が出来上がるように協力した。したがって、展示の制作者と、展示される対象、それを見る大半の来館者とのあいだにはあまり距離がない [Kikumura 1997-98: 3-4]。その意味で、この展示は異文化としての「他者」を表象する多くの博物館展示と異なっている。

個人資料の多用は、AJA が自分たちの歴史を語っているという印象を生み出していた。衣服、サーフボード、工具などの展示資料には、元の持ち主の名前が必ず明記されていたし、写真に映っている人物の大半は名前が明示されていた。来館者の中に

は、友人や親戚が以前に所有していたものや、顔なじみのひとの写真を見ながら、展示を構成するナラティブに自分たちの姿を重ねることができた者もいたに違いない。筆者が展示を見ていた時も、AJA らしきふたりの年配の男性が、第二次世界大戦に参戦した AJA 兵士の写真を見ながら、「これはマツイだ。かれは硫黄島に行ったんだよなあ」などと語り合っていた。このような個人資料は、AJA としての共同体の存在を再確認し、その絆を強める効果をもたらしていると思われる。後述するように、AJA としてのアイデンティティを保ち続けることがもはや「自明」とは言えなくなってきたこの時代に、「自分たち」の歴史と伝統を再評価する場をこの展示は提供したと言えよう。

もちろん、この展示は AJA 以外の来館者をも、十分に惹きつける魅力を持っていた。ビデオや写真などの映像が多用され、昔のサーフボードや、442部隊出身の退役軍人会がハワイ出身の相撲力士高見山に贈った化粧まわしなど、来館者の興味をそそられるものがたくさん陳列されていた。展示空間のデザインにも細心の注意が払われていた。部屋は適度に明るく、暖かい雰囲気を出していたし、AJA のリビングルームを復元した場所では、来館者が実際に足を踏み入れ、ソファに腰掛けてビデオを見たり、ハワイ関連の本を眺めたりしながらくつろげるよう配慮されていた。

展示のデザインを担当したスティーヴン・ドイは、「エスニシティや出身地に関係なく、すべてのひとが自分の文化や伝統に意味を見出す契機」となる空間作りを努めたと述べている [Doi 1997-98: 9]。確か

に、この展示は、AJAの歴史と文化を生き生きと、平易に表現することで、エスニック・コミュニティの絆の大切さや過去の記録を保存することの意義を効果的に表現していると思われる。

* * *

以上のように、「弁当からミックス・ランチへ」には評価されるべき点が多い。展示側のメッセージは明確だし、それが興味深く、分かり易い方法で示されている。来館者を惹きつける、魅力的な展示である。しかし同時に、そのような分かり易さやおもしろさが、AJA の歴史を単純なものにしてしまっているという一面があることも否めない。ここでは、主に AJA というエスニック・アイデンティティの定義に関する問題と、展示のナラティブについての2点に焦点をあてて論じたい。

歴史を通じてエスニシティや人種概念が常に変化してきたことは、最近盛んに論じられている問題である。たとえば、19世紀にしばしば「黒人」扱いされていたアイルランド系移民は、社会的地位の向上に伴い、徐々に「白人」とみなされるようになった [Roediger 1991; Roediger 1994; Ignatiev 1995]。「黒人」や「白人」という人種の定義をはじめ、日常的に使われている様々なエスニック・グループを指す呼称は、安定したひとつの集合体を指すものではない。人種やエスニシティなどの範疇に依拠しながら、「他者」と「自己」を概念化する思想は、常に階級や権力の不均衡などの社会的緊張関係の中で生成され、維持、強化されていくものである。だから、関係の変化に伴い人種やエスニシティの社

会的定義は常に変化し続けるとも言える [Frankenberg 1997; Jacobson 1998]。

実際、AJA もひとまとまりの安定した集合体ではない。この展示がハワイの AJA に限定していることから明らかなように、一口に AJA といっても、地理的差異によってその歴史は異なっている。ハワイの AJA を取り巻く環境は、アメリカ西海岸と大きく異なっていた。周知のように、西海岸の AJA は第二次世界大戦が勃発すると強制収容所に送られた。一方、ハワイの AJA の大半は戒厳令という制限はあったが、戦争中も自分たちの家で生活を続けることができた。展示によると、社会背景の差異は、AJA の気質の違いも生み出した。強制収容所から志願してアメリカ軍に入隊した西海岸出身の AJA は、ハワイの自宅から来た AJA の若者たちを「遊び半分で作って来た子供」に過ぎないのではないかと感じた。強制収容という屈辱を晴らすために戦争に参加した彼らの並々ならぬ決意を、ハワイの AJA は到底理解していないように思えたのだ。逆に、ハワイの AJA は、西海岸出身の AJA のことを、「アメリカ人」のように個人主義的で、必要以上にアメリカ社会に同化していると感じた。展示では両者の差異は軍隊生活の中で次第に解消されたと説明されているが、海を隔てた場に住むふたつの AJA のグループが協力関係を築き上げるまで暫く時間がかかったようだ。また、「ハワイの AJA」と言っても、それをひとまとまりに括ることは難しい。まず、もともとの出身地による差異がある。たとえば、ハワイに住む沖縄出身者は独自のアイデンティティを維持している。

また、今日のハワイでは異文化の交流が進んだ結果、結婚の約半数が「ミックス」、いわゆる「外婚」であると展示は指摘している。その結果、「純粹」な AJA の数は徐々に減少している。上述したように、展示で再生されているビデオに登場するハワイの若者の多くは、複数のエスニシティを背景に持っている。自分のことを AJA と位置づけながらも、実際はアイルランド系、中国系、フィリピン系などの「血」も同時に持つ若者たちは、「日本人」のみを祖先に挙げるのができた19世紀末から20世紀半ばまでの大半の AJA と大きく異なっている。エスニシティを定義する際に当然のごとく利用されてきた「血統」が、徐々に薄められてきている。旧来のエスニシティの概念では簡単に定義できない AJA が多くなってきているのだ。

さらに、この展示の中心に据えられている AJA は男性が中心で、女性の存在は二次的に扱われている感がある。たとえば、第二次世界大戦はハワイの AJA にとって大きな転機と位置づけられ、大きなスペースが割かれているが、そこに登場しているのは主に男性である。真珠湾攻撃の結果、「日本問題」が喧伝され、AJA の「忠誠心」が試されるなか、AJA はアメリカ人としての義務を果たそうと努力した。その結果、ハワイの AJA 男性1432人で構成された第100歩兵部隊は勇敢に戦い、構成員の数より多い1703個のパープル・ハート勲章を授与された。1943年にアメリカ軍がハワイの AJA 1500人を兵士として募ったところ、約1万人もの男性が応募した。諜報部隊に参加した AJA は、敵の暗号を解読したり、通訳として働いたり、捕虜の尋問

をしたりした。

以上のような戦争体験の中心はあくまで男性の AJA である。もちろん、ハワイに残り、戦争を陰で支えた女性の話も含まれてはいる。AJA の女性は、プランテーションで砂糖きびを刈ったり、「勝利の庭」と名づけられた畑で食料を栽培したりした。父親や夫の帰りを待ちながら、家庭を守り、子供を育てた。看護婦になったり、血液銀行に奉仕したりして、アメリカの勝利に貢献した。このような戦争の一面も紹介されてはいるが、展示の中心はあくまで若い男性の戦場における活躍である。ビデオモニターに映し出される AJA 男性兵士による当時の戦場シーンの回想は、凄惨な戦いの様子を生々しく想起させ、見る者に強い印象を与えた。

戦争に加え、農作業や政治闘争など、従来は男性が占有していた領域の話がこの展示の中心に据えられている。ハワイの女性が労働、経済、政治活動の前面に出ることは歴史的にあまりなかったから、そのような事項が中心に展開されているこの展示では、女性の視点は二次的にならざるを得ない。女性の視点が不十分であることは、「弁当からミックス・ランチへ」というタイトルから考えると奇妙である。展示によると、「弁当」は日本人女性が毎朝用意したものだったし、最初の「ミックス・ランチ」を考案したのも、モヨ・イワモトという女性だった。つまり、このタイトルは女性の労働と密接に関連するふたつのものを並置させている。にも拘わらず、実際の展示にある歴史は、男性の視点が中心に据えられている。展示のタイトルと実際のナラティブに、「ねじれ」が生じているという感じ

がした。

以上のような事例からも明らかなように、本来、AJA という表現は、厳然と存在する特定の集団を客観的に定義することではない。むしろ、多様な人間の集団をひとつの呼び方で客体化し、まとまりを与えるものである。もちろん、そのような集団はまったく恣意的なものではない。ある程度の「血」の概念や、移住や戦争など一定の体験を共有する集団である。しかし AJA という表現は、その集団の境界線を固定化することで、背後にある差異や曖昧さを不透明なものにしてしまう。

この展示では、エスニシティの定義に伴う問題意識は鮮明には感じられない。AJA という枠組みの中にある出身地やジェンダーの差異などから生じる多様性は不明瞭だし、AJA でありながらも同時に複数の文化的枠組みを持つひととは十分に認識されていない。AJA という呼び方の奥に潜む、多彩で、時には混沌とした実態を浮き彫りにすることはせず、むしろひとつのまとまりのあるナラティブを提供している。そして、そのナラティブは19世紀のアメリカで人気を博した成功物語を想起させる、進歩を基礎とする語りである。苦難に直面しても、努力をすれば、ひとは前進することができる。しかし必ずや幾度かは大きな試練に遭う。その試練を乗り越えてこそ、本当の救済と贖いが待ち受けていて、最終的な進歩を勝ち取ることができる。いわば、19世紀の人気作家ホレーシオ・アルジャーによる『ぼろ着のディック』のディックの成功物語に代表される、多少の試練がちりばめられた右肩上がりの人生だ [Alger 1985]。日本人移民と AJA は砂糖

きび畑で辛い労働を強いられながらも、じきにプランテーションを離れ、自分たちのコミュニティを築き上げ、ようやく生活が安定したところで、第二次世界大戦という大きな試練が訪れた。その体験を一致団結して乗り越えることができたからこそ、本当の市民として他のエスニック・グループに受け入れられ、「マルチ・エスニック」なハワイ社会の中心的構成員となり得たのだ。

このような歴史観は AJA にひとつのまとまりを提供するという利点があると同時に、その内部にある差異を不鮮明にしまうことは上述した通りである。さらに、このような歴史観は、AJA に苦しみを与えたアメリカ社会の問題の根幹を問い直すことはしない。AJA が長い苦難の道の一歩を経てたどり着いた今の姿を評価する一方で、この展示では、そもそもなぜそのような苦難が課せられたのかに関して十分な考察がなされていない。

リサ・ローは、労働者として経済的に同化させられながらも政治的に差別を受け続けてきたアジア系移民の存在は、アメリカという国民国家が持つ本質的な「欠陥と亀裂」を示していると指摘している。アジア系移民の過去と現在に関する考察は、アメリカという国家が常に内包してきた権力の不均衡や、人種問題を露呈させる作業であるべきだと主張している [Lowe 1996: 9]。実際、ハワイにおける AJA の歴史はアメリカの「欠陥と亀裂」を具体的なかたちで示すものである。明治元年以降、ハワイに労働者として移住した日本人とその子孫たちは、アメリカ合衆国の影響下で生活し、その政治、経済、社会が持つ矛盾や問題を間近に目撃し、肌で感じてきたはずだ。ハ

ワイの併合は19世紀アメリカの帝国主義的価値観が露骨なかたちで示された事件だったし、ハワイはその後も長い間、アメリカの内国植民地的存在であり続けた [Kent 1993: 56-91]。白人資本家主導のもと、ハワイは合衆国の経済体制に取り込まれる一方で、アメリカの太平洋における覇権確立のための軍事基地として利用され続けてきた。その過程で政治、経済的権力を付与されたのはもっぱら一部のエリート白人男性で、AJA を含む「非白人」と定義された者や女性は様々な差別を受けてきた [Takaki 1984; Okihiro 1992; Ferguson and Turnbull 1999]。

このような矛盾が展示で言及されていないわけではない。展示の入口近くにはプランテーションの写真が掲げられ、その横に「ハワイは素晴らしいところだと聞いたのに、一瞥すれば地獄だということが分かった。農場経営者は悪魔だし、現場監督は鬼の集団だ」という、日本人移民の歌が紹介されていた。また第二次世界大戦後は AJA が他のエスニック・コミュニティの労働者と団結し、資本家に対抗するために労働運動を展開したことも触れられている。このような歴史の一面には、当時のアメリカの経済、政治体制が持っていた問題を考察し、人種間の差別や軋轢、資本家による労働者の搾取を恒常的に生み出し続けてきたハワイ社会の構造的問題を明らかにする可能性があったように思われる。

しかし、この展示は資本家を「鬼」と呼んだり、時にはストライキをしながらも、結局は苦勞を堪え忍び、最終的に確固とした地位をハワイで築き上げた AJA コミュニティの成長を強調している。ハワイの

AJA が受けた差別は、アメリカ本土と比較すれば弱かったことが指摘され、その理由として、ハワイではマルチ・エスニックな文化が融合し、AJA が活躍できる独特の「ローカル」文化が形成されたことが挙げられている [Kikumura 1997-98: 4]。そして砂糖きび畑で働くだけの単純労働者であったAJAが、やがてハワイ社会の中核となり、知事や上院議員までも輩出するようになったことが誇りをもって描かれている。展示の主催者は「私たち AJA は、ハワイに住んでいたすべての人種、職業、性の友人たちと一緒に、ハワイをより自由で、オープンな社会に作り上げた」と述べている [Takabuki 1997-98: 12]。

結局、この展示は、比較的単純な進歩のイデオロギーを取り込んで AJA の歴史を説明している。時には試練の話をちりばめながら、苦勞のどん底から豊かな生活にいたるまでの AJA の歴史を展開するこのナラティブは分かり易いし、最後にはある種の満足感を提供するものでもある。しかしハワイ社会の一員として受け入れられ、経済的にも安定した生活を送ることができるようになった今日の AJA の価値観を基に過去を照射しても、ハワイを「地獄」と感じた日本人移民のことや、「他者」として社会的差別を受けてきた時代の苦しみを十分に理解できないのではないだろうか。また、そのような差別や苦しみを生み出したアメリカ社会が孕む「欠陥と亀裂」を明らかにし、問題視することも難しいのではないだろうか。

以上のように、「弁当からミックス・ランチへ」は完成度の高い展示であると同時に、そこには種々の問題が含まれている。いろ

いろなメディアを使い、来館者を惹きつける興味深いナラティブが提示されているが、そのナラティブの基礎にある思想は「ミックス・ランチ」を生み出した現在の AJA の評価が中心である。AJA の辛い過去を生み出した政治、社会構造の批判的な考察はあまりみられない。また、現在、AJA としてひとつのまとまりを持つエスニック・コミュニティが、今後どのように変貌していくかという点についての関心も強くは感じられない。

IV. 終わりに

ローゼンツワイクとセーレンが示したように、多くのアメリカ人が定期的に訪問し、その意義と信頼度を高く評価している歴史博物館は、社会における「過去の記憶」を再構築する有効な場となり得る。その際、歴史博物館は複雑で多面的なアメリカの過去を呼び覚ますことで、アメリカ社会で記憶される歴史観や、現在の社会観、ひいては未来観までも豊かにする可能性を持っている。AJA というエスニック・グループの形成過程を振り返ることで、来館者にエスニシティの意義の再考を促したり、進歩を基軸とする歴史観の裏に潜む様々な問題を示したりすることもできるだろう。

むろん、博物館は多くのひとびとが訪れる機関であるから、来館者が抱く社会通念と真っ向から対抗するようなナラティブを提供するのは難しいことも確かである。博物館展示は一般の研究書とは比較にならないほど多くの目に触れ、心に訴えるものである。スミソニアン航空・宇宙博物館で企画されたエノラ・ゲイの展示をめぐる論争からも明らかなように、展示に対する拒

否反応は社会問題にすらなってしまうこともある [油井 1998; Gieryn 1998]。「弁当からミックス・ランチへ」でも、AJA というアイデンティティを再確認するために博物館を訪れる者が多いと想定されるなか、そのアイデンティティを転覆させるようなナラティブを提示することは容易ではないだろう。むしろ、この展示は、アメリカ社会における AJA のアイデンティティを確認し、その歴史の「進歩」を讃えるための場であるとも言えよう。多数のひとびとが訪れる博物館展示とは、結局、そのようなイデオロギー「装置」にすぎないのだという声もあるかもしれない。

しかし、来館者の意識を転覆させるようなカウンターナラティブを提供している博物館展示がアメリカで見られないわけではない。スティーヴン・デュービンが指摘したように、そのような野心的な展示は1969年にメトロポリタン美術館で開催された「ハーレム・オン・マイ・マインド (Harlem On My Mind)」から既に始められていたと言えよう。エリートによるエリートのための美術館と考えられていた場所で、貧困などの社会問題に直面するハーレムの写真展を開催することは、美術やミュージアムの意義そのものを問い直す大胆な試みだった。その後もアイルランド系アメリカ人の定義や、西部史の定義を見つめ直すことで一般的な歴史意識と対立するような展示がアメリカ各地で何度も開催された。エノラ・ゲイの解釈をめぐる展示が結局失敗に終わったことから明らかなように、これらの展示企画がすべて成功したとは言えない。激しい意見の対立を生み出し、多くのひとが傷ついたものも少なくなかった。ま

た、ある展示があまりにも激しい論争を巻き起こしたために、その後の企画が慎重になり過ぎて退屈なものになってしまった博物館もあった [Dubin 1999]。

それでも、デュービンは、アメリカの博物館はもはや以前のように過去の遺物を保存しておくだけの場ではないし、特定の人間の権力や栄光を讃えるような場でもないと言っている。むしろ、博物館は「やかましくて、意見が衝突するところで、とても生き生きとした場」であるべきだと述べている [Dubin 1999: 227]。同じように、ジェームス・クリフォードは博物館を、異なる文化が出会い、時には互いに対立し合うような「コンタクト・ゾーン」と定義しようと呼びかけている [Clifford 1997: 218]。

デュービンやクリフォードが考えているような視点を取り入れることで、「弁当からミックス・ランチへ」の展示はより豊かなものになるのではないだろうか。異文化との交流や融合を示しながらも、そのような文化間のコンタクトの際に生じた対立や衝突を明らかにし、さらにそれらに関する多様な解釈を紹介してみるのはどうだろうか。つまり、それはこの展示においては、来館者に対し、AJA の歴史やアイデンティティの意義を改めて問い直すことである。AJA とは誰なのか。そのようなグループ・アイデンティティを抱き続けることの文化的意義は何だろうか。また、過去を振り返り、現在の状況を理解することで、AJA にとってのアメリカ国家の意味を考える必要もあるだろう。そのような問いかけを多くのひとが深い信頼を寄せている博物館で行うことで、AJA というエスニシ

ティやアメリカ文化に関するより示唆に富んだ理解が得られるのではないだろうか。このように、博物館展示を通じて様々な対話が生み出され、新たな視点や解釈が今まで以上に積極的に展開されていくような状

況を築き上げるために、博物館関係者のみならず、大学の研究者も展示に対して深い関心を持ち、その対話に参加していくことが望まれよう。

参考文献

- Alger, Horatio
1985 *Ragged Dick and Struggling Upwards*. New York: Viking.
- Bennet, Tony
1995 *The Birth of the Museum: History, Theory, Politics*. New York: Routledge.
- Brigham, David
1995 *Public Culture in the Early Republic: Peale's Museum and Its Audience*. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Cheney, Lynn V.
n.d. *American Memory: A Report on Humanities in the Nations' Public Schools*. Washington D.C.: National Endowment for the Humanities.
- Chinen, Kathleen, and Arnold T. Hiura
1997 *From Bento to Mixed Lunch: Americans of Japanese Ancestry in Multicultural Hawai'i*. Los Angeles: Japanese American National Museum.
- Clifford, James
1988 *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
1997 *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge: Harvard University Press.
- Conn, Steven
1998 *Museums and American Intellectual Life, 1876-1926*. Chicago: University of Chicago Press.
- Coombes, Annie E.
1994 *Reinventing Africa: Museums, Material Culture and Popular Imagination*. New Haven: Yale University Press.
- Dobrzynski, Judith
1997 Glory Days for the Art Museum, *New York Times* (October 5).
- Doi, Steven H.
1997-98 Hawai'i Exhibit Design: A Metaphor of the Mixed Plate, *Japanese American National Museum Quarterly* 12 (Winter): 8-9.
- Dubin, Steven
1999 *Display of Power: Memory and Amnesia in the American Museum*. New York: New York University Press.
- Duncan, Carol
1995 *Civilizing Rituals: Inside Public Art Museums*. New York: Routledge.
- Ferguson, Kathy E. and Phyllis Turnbull
1999 *Oh Say Can You See?: The Semiotics of the Military in Hawaii*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Frankenberg, Ruth
1997 *Displacing Whiteness: Essays in Social and Cultural Criticism*. Durham: Duke University Press.
- Gieryn, Thomas F.
1998 Balancing Acts: Science, Enola Gay and History Wars at the Smithsonian. In Sharon Macdonald, ed., *The Politics of Display: Museums, Science, Culture*. New

- York : Routledge, pp. 197-228.
- Gillis, John R., ed.
1994 *Commemorations : The Politics of National Identity*. Princeton : Princeton University Press.
- Handler, Richard
1985 On Having a Culture : Nationalism and the Preservation of Quebec's Patrimoine. In George W. Stocking, ed., *Objects and Others : Essays on Museums and Material Culture*. Madison : University of Wisconsin Press, pp. 192-215.
- Handler, Richard, and Eric Gable
1997 *The New History in an Old Museum : Creating the Past at Colonial Williamsburg*. Durham : Duke University Press.
- Ignatiev, Noel
1995 *How the Irish Became White*. New York : Routledge.
- Jacobson, Matthew Frye
1998 *Whiteness of a Different Color : European Immigrants and the Alchemy of Race*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Karp, Ivan, and Steven D. Lavine
1991 *Exhibiting Cultures : The Poetics and Politics of Museum Display*. Washington D.C. : Smithsonian Institution Press.
- Karp, Ivan, and Christine Mullen Kreamer and Steven D. Lavine
1992 *Museums and Communities : The Politics of Public Culture*. Washington D.C. : Smithsonian Institution Press.
- Kent, Noel J.
1993 *Hawaii : Islands Under the Influence*. Honolulu : University of Hawaii Press.
- Kikumura, Akem
1997-98 The National Partnership Program in Hawai'i, *Japanese American National Museum Quarterly* 12 (Winter): 2-5.
- Lowe, Lisa
1996 *Immigrant Acts : On Asian American Cultural Politics*. Durham : Duke University Press.
- Lusaka, Jane, and John Strand
1998 "The Boom—And What To Do About It," *Museum News* (November/December): 55-59.
- Macdonald, Sharon, and Gordon Fyfe, eds.
1996 *Theorizing Museums*. New York : Blackwell.
- Okiihiro, Gary Y.
1992 *Cane Fires : The Anti-Japanese Movement in Hawaii, 1865-1945*. Philadelphia : Temple University Press.
- Piehler, Kurt G.
1995 *Remembering War the American Way*. Washington D.C. : Smithsonian Institution Press.
- Pratt, Mary Louise
1992 *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*. New York : Routledge.
- Roediger, David R.
1991 *The Wages of Whiteness : Race and the Making of the American Working Class*. New York : Verso.
1994 *Towards the Abolition of Whiteness : Essays on Race, Politics, and Working Class History*. New York : Verso.
- Rosenzweig, Roy, and Warren Leon
1989 *History Museums in the United States : A Critical Assessment*. Urbana : University of Illinois Press.
- Rosenzweig, Roy, and David Thelen
1998 *The Presence of the Past : Popular Uses of History in American Life*. New York :

- Columbia University Press.
- Sturken, Marita
1997 *Tangled Memories: The Vietnam War, the Aids Epidemic, and the Politics of Remembering*. Berkeley: University of California Press.
- Takabuki, Matsuo “Matsy”
1997-98 “Reflections on the Japanese American Experience in Hawai’i.” *Japanese American National Museum Quarterly* 12 (Winter): 10-12.
- Takaki, Ronald
1984 *Pau Hana: Plantation Life and Labor in Hawaii, 1835-1930*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Vergo, Peter, ed.
1989 *The New Museology*. London: Reaktion Books.
- Vogel, Morris
1991 *Cultural Connections: Museums and Libraries of Philadelphia and the Delaware Valley*. Philadelphia: Temple University Press.
- Wallach, Alan
1988 *Museum Contradictions: Essays on the Art Museums in the United States*. Boston: University of Massachusetts Press.
- Zabierek, Henry C.
1998 Whose History Is It? *Education on the Web* (November 25, 1998).
<http://www.edweek.org/ew/vol-18/> (accessed April 12, 1999).
- 明石紀雄・飯野正子
1997 『エスニック・アメリカ』有斐閣。
- 能登路雅子
1999 「歴史展示をめぐる多文化ポリティクス」油井大三郎、遠藤泰夫編『多文化主義のアメリカ』東京大学出版会, 187-208。
- 油井大三郎
1998 「戦争の記憶と歴史の壁」義江彰夫・山内昌之・本村凌二編『歴史の対位法』東京大学出版会, 245-258。
- 吉田憲司, ジョン・マック編
1997 『異文化へのまなざし』NHK サービスセンター。